

## 令和7年度 厚木市障害者協議会 第1回 一貫した子育て・療育支援プロジェクト

日 時	令和7年7月3日 (木) 午後2時～午後3時50分	
場 所	アミューあつぎ 5階 ルーム 504	
出席者	厚木市障がい福祉課、厚木市教育委員会、厚木市こども家庭センター（こども保健第一係・こども相談係）、 こども育成課、保育課、青少年教育相談センター、 厚木児童相談所、厚木保健福祉事務所、 座間支援学校、伊勢原支援学校、えびな支援学校、 訪問看護ステーションもみじ、やまびこ会（厚木市自閉症児者親の会）、厚木市手をつなぐ育成会、 厚木市社会福祉協議会、一般社団法人クロスオーバー大和  事務局：厚木市児童発達支援センター、厚木市障がい福祉課、こども家庭センター（発達支援係）、 厚木市障がい者基幹相談支センター（敬省略）	

### 1 開会

出席者自己紹介

### 2 議題

#### (1) インクルーシブ社会に向けた取り組みについて

経緯報告：厚木市障がい者基幹相談支センター

令和6年度3月に行ったプロジェクト会議の中で、次年度はインクルーシブ社会に向けた取り組みを行っていきましょうとプロジェクト委員の皆様に承諾をいただいた。昨年度までは「保護者支援」をテーマに取り組んできた。子どもの一一番近くにいる保護者が困ったとき、悩んだ時、誰かに相談したいと思ったときに繋がれるよう「サービスマップ」を作成した。また、子どもの成長を記録して、家族、支援者で情報を共有して支援を繋いでいくためのマイサポートブックの内容を見直し、各機関での普及啓発に取り組みをした。身近な地域の中で安心して療育が受けられるよう、児童発達支援事業所と放課後等デイサービス事業所の連絡会を立ち上げ、このプロジェクトでサポートをする活動を行った。サービスマップやサポートブックは引き続き、各事業所必要な人に届けていただく、使っていく中で課題があつたらプロジェクトで検討していくことを継続していく。

事務局の中で、「保護者支援」について考えていったときに、現在は働く保護者が非常に多くいることを感じているが、その働く保護者をこの地域で支援できているだろうかという話題がでた。現在の経済的な理由で働く保護者、両親のウェルビーイングという意味で考えた時にお仕事をする、仕事をすることを選ぶという保護者が多いと感じている。例えば医療的ケアのある子ども、発達が少しうつくりな子ども、発達に特性のある子どもがみんな同じように、幼稚園や保育園、学校や学童をちゃんと選んで利用することができているだろうか。もしできていないのであれば、そこを検討や取り組みをしなければいけないと感じている。それを事務局で考えた時に、「厚木市障がい福祉計画<第7期>」の中にインクルーシブ社会へ向けた取り組みということが書かれている。

「ともにまなび、はぐくみあうインクルージョンの推進」「すべての子どもができるだけ同じ場で、ともにまなび育つことを目指すインクルーシブ教育の推進」ということが福祉計画とされているところから、子育てプロジェクトでインクルーシブ社会について取り組みが必要と考えている。基幹相談で日々地域の方から相談を受けているがインクルーシブとは何かと考えさせられる場面が多い。ともに同じ場所で学ぶことが大切だというが、何の配慮も工夫もないまま、集団での活動に参加させられている。先日あったのは、肢体不自由な児童が希望する地域の学校に入学ができ、友人と楽しそうに学校生活を送っている様子だが、担任の先生が授業より介護をしていた。

先生はとても一生懸命であったけれど、どこかこれで良いのだろうか、という印象が残った。こういった課題がたくさんあるな、と感じている。この福祉計画の目標になるということは、まだスタートラインに立っているということ。市民全体がこの考え方を知らない、浸透していないから目標となっている。我々支援者もインクルーシブについて完全に知っているわけではない、何ができるかというところから課題と一緒に取り組んでいければと思っている。

事務局（厚木市児童発達支援センター）より

国の方針がインクルージョンと決まっていることはわかっていると思うが、親支援を考えた時、働く親を支える場面で躊躇が多く、何ができるかということを考えた時、やはりインクルージョンなのかなあというのが事務局の考えであった。インクルージョンというのをこのプロジェクトで考えたいとなった。まずこのプロジェクトは多くの委員の方々の意見交換を行いますめに、厚木市内の子どもにかかる支援者の委員より、それぞれのインクルージョン、共生社会にむけて、イメージや対応など、感じていることを個人の思いとしての意見をいただく。

各委員自己紹介をしながら意見を出す

・今の現場でいうと正直なところ高校への進学の際に厚木西高校に進学イコール「インクルーシブ」といったこと程度で、そこで何をやっているとか、どういった取り組みをしているとか深くわかっていない。このプロジェクトで取り上げていく中で各委員からの情報をもてたらと思う。窓口で対応する際、さまざまな対応や質問があるので、このプロジェクトの中で知識を広げていきたい。

・小学校教員時代に、インクルーシブ担当として学校の現場がインクルーシブに走り出したころに担当として仕事をしてきた。インクルーシブ教育を根底に動いていくことが良いのだと思う。教育指導課では、今までインクルーシブ教育に力を入れていたけれど、今年度はより一層力を入れていく予定である。「ともに学び、ともに育つ」

教育を受ける、教育を受けた後社会に出ていく。教育場面も一緒に育つという、社会の中でインクルーシブにつながるような教育をしていく。その教育がインクルーシブ社会につながっていけるようにしたい。

・担当する部署は未就学の子供が対象となるので、教育というと対象ではないが障がいのある子どもを抱える親御さんが働くために保育園に入れたいとなったとき、本来なら家から近く、職場から近いところを選ぶのだが、受け入れてくれる保育園を探すことも難しいし、絞られてしまうことが現状である。教育につながる手前の所で、何ができるかということをこのプロジェクトを通じて見つけていければと思う。

・児童虐待を扱う部署として妊婦や児童、発達に課題がある子どもが増えてきている印象ある。

・入学の前段階と言われているけれど、ひよこ園と幼稚園を併用している児童もいる。「ともに学び、ともに育つ」いうことがこう言うことからスタートしているのかと感じた。

・インクルーシブ社会の推進を部署としてどのように進めていけるかと考える。

・子育てをしている時にインクルーシブ社会を感じたことは教科書の中身、写真や挿絵が多様化していることで感じた。その中から教育するということは家庭が大事だと思うが、保護者も全てそうはいかない。インクルーシブ教育を地域にも広げていかなければならない。厚木市は支援学

級も増えているが通常級の学級を充実していくことも大切と考える。

- ・施設の児童、家庭の児童が 1 つの学校で教育を受けているということは素晴らしいことだと思う。一方で学校の中でマンツーマン対応でないと学習が進まない生徒も多く存在している。
- ・障がい児の進学にインクルーシブ校の希望があるが、他の選択肢やインクルーシブ社会の推進について、このプロジェクトを通して学びたい。
- ・医療的ケア児、障がい児の親が働きたいと希望するケースが増えていると感じる。保育等を応援したいと思うが、現在は保護者が選べる環境ではないと感じる。保育や教育にあたっている大人へのサポートも必要と感じる。
- ・子どもの発達がわかって仕事を辞めた。子どもが小学校 1 年生の時から支援学級在籍となり、授業参観等でとてもショックを受け、ショックを受けた景色は今も忘れない。その時はとてもショックだったけれど、今思えばインクルーシブというのには気持ちのいいかな、と思う。
- ・子どもたちはお互いにそれぞれの特徴をわかり合っている。あとは、お互いの気持ちの持ち方なのかと思う。
- ・その教育者だけが頑張れば良いという問題ではなく、全体で推進していかねばと思う。
- ・インクルーシブ社会を推進していくところで支援学校、通常級と相互の理解ということが必要と感じる。保護者が周りから偏見されるのではないかと不安に思っているところもある。
- ・自分が子供の頃、同級生に車いすの子がいたが、成人した後に集まることがあるが、自然にサポートしている同級生を感じる。一緒に成長しておりサポートが必要で、することが普通と話していた。現在の職務としては、医療的ケア児を抱えて不安な母子のサポート体制を整えることが仕事となっている。何も支援がない中で親御さんが戦っていくところをサポートしている。子どもたち同士は大人よりも育んでいっていると感じている。
- ・インクルーシブを厚木市で取り組むというフォーラムに参加した際、「インクルーシブという多種多様な子どもが同じ空間で教育をはじめれば、みんな優しくなるから」と言っていたがその言葉に、なぜインクルーシブな環境の中でうちの子供たちを学ばせなければいけないのか。学びのため、インクルーシブ教育の存在のために最初の子たちは犠牲になると感じてしまった。みんなと混じりたい、一緒に良い児童は一緒に、混じりたくない、一緒にイヤと思う児童は混じらなくても生きていける社会というものが、本人が望んだ時に望んだところに入れる入口があればよい。兄弟であっても選ぶものが違うと感じているので、それそれが適した環境を選ぶことができる世界になったら良いと思う。定形発達の子たちが色々な環境を選べる社会というのは、非常に大切なことと思う。
- ・中学校から高校に入学する場面で社協の福祉基金を使ってインクルーシブ校に入学するというケースが年にちらほらある。そこには親御さん、世帯の収入というところで大変だった部分があり、何かあるのかなという、そういうことでしかインクルーシブ教育を知ることがなかった。また、保護者が働きたいというところは、ウィルビーイングなところもあるのだけれど、この経済状況の中でやっていかなければいけないという切羽詰まった思いがあるのかと感じる。地域福祉を推進していかなければならない厚木市社会福祉協議会のなかでインクルーシブをあまり聞かな

いというのは課題と感じているので、このプロジェクトを通じて得た情報を所内で共有していきたい。

・保育園、学校、仕事も選択肢が少ないと感じる。選べる社会となるのが本当の意味でのインクルーシブ社会、教育だと考える。

・担当部署になって厚木市内のインクルーシブ教育について慌てて調べた。子どもたちは自然と手助けができる、普通に障がいなどについて理解している様子。大人のほうが、何かしてあげなければと、頭ががちがちになってしまう。このプロジェクトを通して皆さんのお意見を聞いて、進めていければと思う。

・身近な子どもで保育園の少人数の中で個別扱いをされていた児童が、小学校入学とともに30人から40人の大きな集団の中に属することになり、つまづいた児童がいた。そこで調べたら、発達に課題がある事がわかった。みんな同じようにやらなければいけないということが苦痛だった。みんな一緒に教育を受けるということが大切なだけれど、それによって学校に行きたくない、など不登校になってしまうケースもある。インクルーシブということはとても大切なことだけれど、それと同時にとても丁寧に、乱暴にしてはいけないと感じている。幼稚園、保育園、小学校、中学校などそれぞれのステージでインクルーシブに取り組むとき、多くの機関と意見を交わしながら進めていくことが大切だと思う。

・「インクルーシブ」という言葉を10年ほど前に初めて聞いた時は、座間支援学校の公開講座で、インクルーシブとは、今の時代の取り組みとして紹介されたのがきっかけだった。当時は「素敵だな」と感じた。それから10年以上経過して、インクルーシブという言葉は浸透して、実態はわからないけどインクルーシブっていいことだよねっというようなイメージがあると感じている。その場、というのは広まったと思うが、ただ一緒に学ぶ、ただ一緒にいることが良いわけではないということ、理解するだけではなく質を高めていかなければいけないと感じている。弱い方の声、言葉というものは届きにくく、ただ単に混ぜられると苦しくなってしまう方もいる。みんなが楽しく過ごせるためにはどうしたら良いのか、ということをこのプロジェクトでも意見交換していければと思う。

・様々な話を聞いて、「本人の気持ち」というのを大事にされるのが一番よい。みんな一緒に良いのだろうという決めつけでみんな一緒にするのではなくて、それぞれに違うけれども一緒にできればよいのかと思う。

・自宅で子どもと話す中で、学校の中の支援級の事などが話題になり、子どもたちは受け入れていると感じる。どちらかというとその親、その祖父母といった世代が受け入れられていない様子が聞かれてくる。その世代にも理解してもらえたらいと感じる。地域からの相談の中では、支援学級に属しているが担任から障がいを理解してもらえない、児童クラブでは対応が難しいから放課後等デイサービス事業所に行った方がよいと言われたなどの相談がよくある。その中でどのようにインクルーシブ社会や教育を進めていけばよいのか、このプロジェクトで色々な意見を聞き、学んでいきたい。

・人が好き、と一人ぼっちというのは全然違うこと。選べる、その人が居たい場所を選択できるという、そういうことが全部できるようになったら「インクルーシブ」という言葉はなくなるのだと思う。

・関わっている方たちはインクルージョンから外れてしまった人たち。その方たちが成人になってどうしていこうか、という時に事業所に繋がった。このままで良いかというとそうではなく、社会と繋がりたいとずっとずっと考えている。インクルーシブとは社会的包摂、政治的にも使われる難しい言葉ではあるが、つまり社会の中に包み込むということ。それは教育に限った事ではなく、保育も会社もそうであるけれど、教育の部分だけ特化したかのように言われているから、取り上げられているだけ。インクルーシブという言葉がなくなったら、インクルーシブ校がなくなるのが目標というが、現在は増えていて、このままだと一度増えてからなくなっていくのか。第一には排除しない、排除しない為の配慮、配慮という名の排除も必要になる。一緒にいるだけでは済まない、排除することは一人では背負えない。社会包摂のための配慮という議論はされにくい。一緒にいる方法の多様化、どうやったら色々な人がいる中で一緒にいる方法の多様化ができるのか。ひとつは仕組みとして作る方法、理解をされる環境、そのベースを作っていく。そのベースを作っていくところというのがはっきりしていない。なんとなく一緒に居れば何とかなるのではないか、子どもたちにそのベースとなるもの、何を教えるのかといったところがはっきりしていないのが日本という国なのではないか。そこは福祉教育なのだと思う、多様性を学ぶには教育が必要。なんとなく一緒にいる方法を教えるのはどこか。一緒にいることへの教育が必要。多様性を学ぶには教育が必要と感じる。では、それを誰がやるのかというのを決められないでいる日本。

・インクルージョンというのはどういうことなのかを考えた時、具体的な状態像に仕上がっていかない。継続的に考えていくことが重要なのだと思う。誰がどのように仕組みを作っていくのか、どこで学ぶのか、その環境はどうやったらできるのか、その福祉教育というのを厚木市としてどのようにしていくのか、このプロジェクトで話していくのも良いかもしれない。

全体で色々な意見をいただき、広がったところもあるがプロジェクトに向けてもう少し絞っていけたらと思う。今後のプロジェクト会議でもう少し深まるようにしていければと考えていく。

## (2) 児童発達支援事業所・放課後等デイサービス事業所連絡会について

このプロジェクトメンバーでもある放課後等デイサービス事業所えんじえるビレッジ金田が欠席のため、事務局より報告する。昨年度は連絡会を3回実施し、事業所間の連携や支援力を高めてきた。今年度は4回から5回の実施、合同事業所説明会を開催予定。5月に第一回の連絡会があり、市内52事業所ほどある各事業所に声をかけ29事業所、47名が集まって、研修会について、合同説明会について、各事業所の取り組みについてなど情報交換をおこなった。最近の話題は学校との連携について、どのように連携していくか利用者(児童)に反映できるかということが話し合われた。また、事業所連絡会主催の新人向け研修会が6月26日に行われ、29事業所62名の参加があった。非常に若い世代の方が参加されており、真剣に研修を受けている様子であった。今年度開催を予定している合同事業所説明会のちらし(案)を配布している。11月24日、25日祝日を含めた2日間となっている。厚木市内に多くの事業所があるので、横のつながりと事業所を知っていただく機会としている。このプロジェクトの方も興味があつたらぜひ足を運んでいただきたい。

## (3) 医療的ケア児コーディネーターの意見交換、協議について

保育園の受入れについて受け入れの進みが遅いと感じている。厚木市在住の18歳以下の医療的ケア児は40人以下で個体数も少ないのが現実ではあるから、会議の度に報告をする、現状の課題を伝えたほうがよいと感じている。医療的ケア児の受入れに関する法律を資料に添付したが令和3年に施工され、「医療的ケア児の健やかな成長と家族の離職防止」を目的とした法律。「医療的ケア児と家族の切れ目ない支援」としている。医療的ケアを抱えた子供がいても働きたいと思った

ときに働き続けることができるような地域にして欲しいというもの。そのためには、福祉だけではなく、医療、保健、保育、子育て、労働、教育、みんなで切れ目なく関わって協働してサポートしようという法律となっている。厚木市でも保育園、幼稚園に入れない、療育を受けられる場所が少ない、親の介護に行きたくても預け先がなくて行けないなど、預かり先の課題、成長した先、18歳以降の通い先がない、体調が悪くなった時に地域の救急診療に搬送されてもケアされず、子ども医療など離れた場所にある主治医まで母が吸引しながら連れていくなどが実際に起こっている。このような現状をこの場で共有し、少しでも課題を減らしていければと思う。

#### (4) その他

各配布資料、研修等の説明

以 上

### 3 閉会